

ている。ある程度顔を知っているから、薬剤師会に「お願いね。」って言える。あの作業を、自分達だけでやろうと思うとぞっとするね。その辺の感謝の気持ちを持てるようになった。

森田先生が気仙沼市と交渉してくださったのだと思っています。

森田

顔の見える関係は、本当に大事なことですよね。それぞれ、官であったり、民であったり、医療介護福祉、それぞれ一生懸命やっているわけですが、悪く言えば、バラバラでした。災害時の対応について、当時の地域医療委員会の大友前会長の際に、各役所関係、消防、自衛隊等を含めて、警察とか医師会、歯科医師会、薬剤師会が集まった会がありました。災害発生時の対応について、それぞれの立場で真剣に考えて話し合いをしていたわけです。実際に東日本大震災が起きたことで、会議のための会議ではなくて、顔の見える「動ける」関係ができたと感じます。

ワクチン接種に関して言えば、顔の見える関係の中で、結果的に市では接種率が95%近くになっていますよね。これはかなり突出しているんです。表にはあんまり出ないのですが、薬剤師の先生方にご協力をいただいて、精密にたくさんの薬剤を用意していただいた。そういう連携ができ、市民の方もスムーズに接種できておりますし、これまで、ほとんどトラブルがありません。皆で協力してやっていくこと、それが高い接種率にも繋がっているのかなと思います。それこそ官民一体でやってきたと思います。なかなか進んでいないところに関しては、県の医師会の会合を聴いていると、いまだに「これは県の仕事だ」とか、「市がやるべき仕事だ」、仲違いをしているところが結果的に進んでいません。非常に残念なことです。

本来は、誰のために仕事をするか、必要な人のために我々が仕事するということであると思います。



皆で、顔の見える関係を作って仕事していくというのが理想なわけです。おかげさまでそういう素地ができていく感じがします。

築場

表には出なかったとのことですが、多大なる協力を頂きました薬剤師会さんからお願いします。

武田

薬剤師会は、これまで官の仕事に携わることはあまりなく、ようやく「皆様のお役に立てる」と実は嬉しかったです。私は医師会の方の顔は知っていますが、その他の薬剤師は、自分の門前の医師の顔ぐらいしか知らない人が結構いるんですよ。少ないですけど、知っている人が来るのであれば、失敗しないように、当然まじめに真剣にやるんですけど、より一層失敗できない責任を果たそうとやっていたみたいです。現場では10人くらいで作業しますが、合間を縫って会場に行って、「何番のレーンにいるのが何なに先生」、親近感を持つというか、お近づきになれたような気がして。みんなけっこう喜んでやっていたね。

築場

良いエピソードですね。

病院との連携についても教えていただけますでしょうか。

■「連携連絡票」から様々なツールが誕生

小松

病院との連携ツールについては、連携連絡票の逆バージョンがありまして、医療機関発信型の連携連絡票があります。これに関しては、作成までに2年4ヶ月かかりました。薬剤師さんからのご要望で作って始めて、色々な意見を聞いて作ったものです。あとは、入院時の「情報提供の手引き」、入院時情報提供の添え状を作りまして、退院近くなったら連絡くださいと言添えて、情報提供書を添えて出したりもしています。気仙沼市立病院では、退院に向けた手引きを作っていただいています。先ほど、森田先生からもお話がありましたが、先生方に医療系サービスの導入の確認をとった際に、必ずケアプランを提出しなければならないという法律になりました。当初、「なんでそんなもの持って来るんだ!？」と先生からすれば、介護保険法が変わった事をご存じ